

大正ロマンの香りを残す貴重な洋館

忍の城下町として知られる行田市は、江戸時代から足袋の製造が行われていたが、明治時代に入ると規模が拡大し、足袋産業へと発展していった。最盛期には全国の足袋生産量の8割を占めていたという。今も行田市には足袋製造と関連の深い建物が多く残っていて、古臭い街並みと共に往時を偲ぶことができる。ただ、城下町特有のいりくんだ道路配置と短冊型の地割のために、表通りに面した建物は少なく、多くの建物は裏通りに立地するので、人目に付きにくいのが残念である。約 100 基存在するという足袋蔵はさらに奥の路地裏に点在する。行田市の中心部を国道 125 号線が東西に横断しているが、市役所付近から大長寺にかけての区間には、看板建築の店舗も数棟存在している。

明治末期から大正時代の行田は織布業、染色業、ネル張業、底張業、印刷業、箱屋、糸商、ミシン屋、増地業など足袋関連産業が派生してまち全体が「足袋づくり一色」に染まっていった時代でした。今、行田のまちを歩いてみると当時の建物が多く残っている。次は、日本遺産として登録された足袋蔵、だけでなく、行田の洋風漂う建物群です。

明治末から大正時代の建物・足袋蔵は①「栗代蔵」明治 39 年の足袋蔵(土蔵)、②「保泉蔵」明治後期と大正 5 年の土蔵、③「足袋蔵ギャラリー“門”・クチキ建築設計事務所」大正 5 年の足袋蔵、④「イサミスクール工場」大正 6 年の木造洋風住宅と大正 7 年の旧事務所、⑤「長井写真館」大正 11 年の木造洋館、⑥「牧野本店（足袋とくらしの博物館）」大正 11 年の木造洋風工場と大正 13 年頃の店蔵、⑦「忍町信用金庫」大正 12 年元来は忍町信用組合（銀行）の店舗、⑧「大澤蔵(大澤家住宅旧文庫蔵)」大正 15 年の住宅・土蔵(レンガ蔵)、⑨「時田蔵」大正の足袋蔵、⑩「田代蔵」大正の住居と土蔵（足袋蔵）、⑪「奥貫蔵」大正～昭和初期の足袋蔵(土蔵)。

続いて昭和時代の建物・足袋蔵は、①「彩々亭」昭和元年・7 年・10 年の足袋御殿、「行田窯」昭和初期の足袋蔵、②「イサミ足袋工場」昭和初期の大規模足袋工場、③「鯨井家倉庫」昭和 3 年(1928)建設の足袋原料倉庫(コンクリート造の足袋蔵)、④「時田足袋蔵」昭和 4 年足袋専用倉庫(土蔵)、⑤「忠次郎蔵」昭和 4 年の店蔵(土蔵)、⑥「翠玉堂」昭和 4 年の町屋、⑦「小川源右衛門蔵」昭和 7 年の店蔵(石蔵)、⑧「武蔵野銀行」昭和 9 年店舗、⑨「牧禎舎」昭和 15 年の事務所兼倉庫と工場。

昭和戦後の建物と足袋蔵は、①「長光寺の石蔵」昭和 20 年頃、②「松坂屋蔵」昭和 25～26 年倉庫(モルタル蔵)、③「孝子蔵」昭和 26 年の足袋蔵(石蔵)、④「舞原蔵」昭和 27 年建設、⑤「栗原家モルタル蔵」昭和 28 年のモルタル造の足袋蔵、⑥「小沼蔵」昭和 29 年の石蔵など。

中でも、ここ新町商店街にある「今津蔵」この蔵は嘉永年間(1848～1853)の土蔵(店蔵)の奥に洋風の建物がある。『旧忍町信用組合店舗』とさらに奥に『長井写真館』がある。この近辺は表通りに面していないところだ。

『旧忍町信用組合店舗』は木造洋風銀行店舗。ルネッサンス風の木造二階建てで屋根と壁面の配色がなかなか瀟洒だ。屋根にはドーマー窓が設けられている。行田の古い洋館が素敵だ。ただし、急がないと朽ちて無くなるかも。この店舗は大正ロマンの香りを残す貴重な洋館として 2016 年に行田市指定有形文化財となり、今年

3月、同市役所近くの水城公園内に移築された。

そして、『長井写真館』は大正11年(1922)にフチイ写真館の店舗兼住宅として建てられた、現存する木造の洋館です。裏側は傾斜のきつい屋根になっていて、大きな窓が付いてるんです。そこからスタジオに自然光が入ったのでしょね。大正時代の戦前の写真館の特徴を良く残す建物です。モダンで洒落たデザインの大正時代の雰囲気良く残す貴重な近代化遺産で、まさに『大正ロマンを感じる遺産』そのものです。

この建物などはかなり傷みも激しいので移築したり 再利用というのは難しいかもしれない。でも大正から昭和にかけての古い建物が残っているのですから古い建物をうまくリフォームして魅力的な街を作って欲しいです。

